

■ 観天望記（編集委員会から）

編集委員長 石垣（20期）

ダンチョネ節口上を探る

10月29日に今年もOB総会と同日にホームカミングデーが行なわれ、その中のプログラムに立食で歓談や催し物を楽しむ交流会があります。その交流会のトリを飾るのがYWVのOB・現役がリードする「みはるかす」斉唱です。20期安武さんの口上から始まるのはもう毎年の恒例です。この口上は山で歌ったダンチョネ節の口上であることにお気づきの方も多いでしょう。しかし、ダンチョネ節は神奈川県三浦市三崎の民謡なのです。から、「富貴名門の子女に・・・」の口上はどう考えても不釣り合いだと思います。そこで今回の「観天望記」は多少残ったページを使って、ダンチョネ節の口上とは何なのかを探索してみました。

1. まずは、ダンチョネ節とは

ダンチョネ節（歌詞はスペースの関係で割愛）は前述しましたように三崎の民謡で、港町の花街で三崎甚句と共に歌われてきたものだそうです。「ダンチョネ」とは「断腸の思い」とか「ただの漁師の掛け声」とか諸説あります。真面目で偉い団長さんでさえもねえ～、という意味の「団長さんもね」という説もあるそうです。

詩の内容は船乗りの悲哀ですから、個人的には「断腸の思い」が一番しっくりきます。悲哀の歌ですので民謡から離れ、沢山の替え歌が大正から昭和に掛けてできたようです。代表的なのは軍隊での替え歌で、やはり悲哀が漂っています。特攻隊節の歌詞から一部を書き出しました。

(1番)

沖の鷗(かもめ)と飛行機乗りは
何処(どこ)で散るやらネ
果てるやらダンチョネ

(5番)

飛行機乗りには娘はやれぬ
やれぬ娘がネ
行きたがるダンチョネ

見覚えのある歌詞に近いでしょう。我々が歌ったダンチョネ節はこの軍隊の替え歌を基に更に「山の男」を入れた替え歌と考えられます。ネットワンダリング（注）してみると、色々な大学のワンゲルや山岳部で微妙に歌詞が違うダンチョネ節を多く見ることができます。どこかのホームページには戦後、山岳ブームと共に山バージョンのダンチョネ節が大学間で流行ったと書いてありました。

（注：「ネットサーフィン」という言葉がありますが、我々はワンゲルですので、勝手に「ネットワンダリング」と言う言葉を作ってみました）

2. では、口上は何処から

更にネットワンダリングをしていると見つかりました。「蒙古放浪歌」です。昭和初期に流行った歌で蒙古の砂漠を舞台に大和男子の血潮を歌ったものです。後に鶴田浩二さんや加藤登紀子さんも歌っていました。メロディーや歌詞はダンチョネ節とは全く異なる歌ですが、この歌には「序文」というものがあります。見ればすぐに、「これがダンチョネ節の口上のルーツだ！」と感じます。以下、蒙古放浪歌の序文を書き出しました。

富貴名門の子女に恋するを純情の恋と誰が言う
路頭に彷徨う女性に恋するを不純の恋と誰が言う
雨降らば降るがよい 風吹かば吹くがよい
泣いて笑って月下の酒場にこび売る女性は
水蓮の如き純情あり
酒は飲むべし百薬の長

女は買うべし人生無上の快樂
幼少美女の膝枕に快樂の一夜明ければ
夢もなし また金もなし
砕く電剣握る美林
のぞくコンパス六分の儀
ああ我山行 渡鳥
いざ唄わんかな 蒙古放浪の歌を

今度は山ではなく海です。この歌を基に水産系の大学や学部（旧東京水産大学や北海道大学など多数）を中心に「水産放浪歌」や「水産逍遥歌」という名の替え歌が寮歌としてできた様です。そしてその序文も同様に替えられ、特に最後の四行は替えやすいので色々なバージョンがあります。以下例として2つ書きます。

- 叩く電鍵 硬く握る操舵機、我ら海の子鷗鳥、明日の命と誰ぞ知る、いざや歌わんかな水産逍遥歌
- 響く雷鳴 握る舵輪、睨むコンパス六分儀、吾等海行く鷗鳥、さらば歌わん哉 吾らが水産放浪歌
(単語で意味の分からないものは調べましたが、スペースの関係で割愛)

3. ついに合体、口上とダンチョネ節

大学の山岳系クラブで歌われていたダンチョネ節と水産系の大学などの寮歌として歌われていた水産放浪歌の序文が、大学内で合体したとしても不思議ではありません。元は替え歌ですから、変化したり良いと思ったものを取り込むのは当たり前だったのでしょう。残念ながら合体のルーツは見つかりませんでした。我が知っているダンチョネ節の口上と歌が、このようなルートで出来上がったことは間違いないと思います。

最後に YW 1977 年歌集に書かれていたダンチョネ節の口上を下記します。歌集通りの原文を書き、小生が本稿作成の過程でこちらの方が正しいのではないか、と思う漢字等を括弧で追記しました。



風紀（富貴）名門の子女に恋するを純情の恋と誰が言ふ ヨイシヨ
路頭にさまよう女性に恋するを不情（不浄）の恋と誰が言ふ ヨイシヨ
雨降らば雨降るよし 風吹かば風吹くよし
泣いて笑って月下の酒場にこび売る女性の中にも
水蓮のごとき純情あり ヨイシヨ
酒は飲むべし百華（百薬）の長 女買うべし人生至上の快樂
幼少（妖娼）美人の膝枕に快樂の一夜を明くれば
（夢もなし また金もなし）
流れる汗にザイルをかつぎ、かじかむ腕にピッケルかかけ
ああ我等山行く渡り鳥 明日の会（命）を誰か知る

尚、本稿はネットを中心に調べたものであり、更に替え歌や伝承のため変化を起こしていますので、内容はあくまで私見で歌詞も正確かどうかはわかりません。ですので誤りがあっても「ダンチョネ」と言って、大らかな気持ちで読んでいただければと思います。また、口上には女性に対する不謹慎な表現がありますが、原文のままにしました。昔の話だからということでご容赦ください。



（おまけ）

ちなみに、八代亜紀さんの舟歌の中にダンチョネ節が挿入されていますが、「沖のカモメに深酒させてヨ・・・」は作詞家阿久悠さんの創作だそうです。これも一種の替え歌ですかね。